

米国における大学体育・スポーツの取り組みに関する現地調査

難波秀行¹⁾, 中田賢一²⁾

Field Survey on Physical Education and Sports Initiatives in U.S. Colleges and Universities

Hideyuki NAMBA¹⁾, Kenichi NAKATA²⁾

はじめに

わが国の大学体育を考える際に、背景にある18歳人口の減少を念頭に置く必要がある。18歳人口は1992年の205万人をピークに減少し続けており、2023年は112万人、2040年には88万人、すなわち半世紀で半減することが推計されている(文部科学省, 2020)。大学(短大含む)進学率が54%(文部科学省, 2020)になり微増傾向あることから、相対的により多くの国民が高等教育を受ける機会を持つようになるため、次世代に向けた教育内容の充実が重要である。高等教育における保健体育科目(以下、体育科目)の位置づけは、正課(必修)として扱われていた体育科目が、1991年の大学設置基準の大綱化により必修科目から外す大学が増えて常勤の体育科目担当教員が減少した。全学必修の大学は2016年時点の悉皆調査で28.0%、一部必修40.8%と示されている(梶田ら, 2018)。全国大学体育連合の会長を2011年から2023年まで14年間務めた安西氏は、大

学体育のこれからの施策について、1) 教育・授業科目として大学体育の再構成、2) 体育スポーツ分野の先端研究の振興、3) 高等教育での体育スポーツの位置づけ(STEAM教育に体育を組み込むなど)、4) 地域社会のスポーツ振興の拠点、5) 常勤教員数の減少と大学予算の逼迫への対応、を挙げている(安西, 2023)。大学体育は地域社会の変化、国際化、少子高齢化、DX化など時代の変化に合わせて、良い部分は残しつつ変化が必要であろう。

わが国の高等教育機関、いわゆる「新制大学」は歴史的にみて、主に米国の大学をモデルとしており(田崎, 2001)、欧米の多くのスポーツは、明治時代(1868~1912年)に米国を介して日本に伝えられ、その中で最も広まり愛好されたスポーツは野球である(大内, 1975)。日本において、米国は体育・スポーツの文化史を理解する上で重要な役割を果たしている。すなわち、正課の体育科目による教育と課外の学生スポーツの両方において米国をモデルとしてきた。そのことから、米国の大学における

1) 日本大学理工学部

Nihon University College of Science and Technology

2) 兵庫大学附属総合科学研究所

Hyogo University Institute of Comprehensive Science

体育科目の教育的な意義、また全米大学体育協会（以下 NCAA: National Collegiate Athletic Association）に代表される競技スポーツ団体における学生スポーツを理解することは、わが国の大学体育・スポーツの発展のために重要な示唆を提供すると考えた。

アマースト大学は、1861年に米国で初めて体育科目の課程を設立した大学として知られており（Allen, 1869）、米国の大学体育を学ぶ上で肝要と考えた。この大学は全米有数のリベラルアーツカレッジである（Best National University Rankings HP）。幅広い学問分野で教育を展開し、学生が学際的なアプローチで知識を深め、リーダーシップや社会的責任感を培うことを重視している。体育部門設立当初、体操専門教員（大学体育教員）の役割を担う必要条件として、1）運動を指導する優れた能力を有すること、2）医学的、衛生学的見地から健康への適切なアドバイスが可能であること、3）解剖、生理学が教授できること、4）優れた人格が備わった人物であること、以上の4つを挙げていることが記されている（大櫃, 2015）。わが国では、新島襄氏が1870年にアマースト大学で学士号を取得し、この大学をモデルとして同志社大学を創設し、日本で最初の近代体育の授業が行われたことが報告されている（田附, 2014）。一方、マサチューセッツ工科大学（以下 MIT: Massachusetts Institute of Technology）は理系の単科大学として世界的に評価されており、ノーベル賞受賞者も多数輩出している（MIT News HP）。この大学は教養教育が充実していることでも知られており（MIT Education HP）、卒業するためには体育が必修であり、さらに水泳のテストに合格する必要がある（MIT Physical Education & Wellness HP）。このような伝統と歴史のある大学で、現在の大学体育がどのようなカリキュラムで行われ、大学スポーツがどのようなコンセプトに基づき運営されているのか、競技スポーツを含めて大学がどのように学生を支援しているのか、興味深いテーマ

と考えた。

本調査では米国内において、1）大学体育発祥の地と最先端の理工系大学における大学体育の実態を調査すること、2）学生スポーツ（大学野球）を対象として、その取り組みと大学における学生スポーツの位置づけを調べること、3）その他スポーツ関連施設への訪問による米国スポーツの理解を深めること、によりわが国の大学体育・スポーツの発展への情報を得ることを目的とした。

1. 大学体育発祥の地と最先端の理工系大学における大学体育の実態調査

1.1 マサチューセッツ州アマースト大学

大学体育発祥の地であるアマースト大学における大学体育の実態調査のため、2023年8月6日から8月11日までマサチューセッツ州西部に位置するアマースト町を訪問した。

渡航前5月11日にアマースト大学のアスレティックディレクター（体育局長）である Donald Faulstick 氏（以下 Don 氏）に連絡をとり、8月8日、9日の2日間の面会をする予定を調整した。また、アマースト大学を訪れるにあたり、国内で事前に下調べを行い詳細な打ち合わせを行った。日本の大学体育にアマースト大学が与えた影響について理解を深めるために文献研究を行った。特に「Physical Culture in Amherst College by Nathan Allen」を参考文献として活用した。アマースト大学アスレティック部門のウェブサイトから、Don 氏のメールアドレスを入手し、5月11日に以下のメールを送った。

Dear Mr. Don Faulstick

My name is Hideyuki Namba and I work at Nihon University in JAPAN.

I am writing this e-mail to you because I would like to know about Amherst College Athletics and PE program. I studied Physical Culture in Amherst College by Nathan Allen. I will be in

Massachusetts this summer from August 10 to 17 and would like to visit Amherst College.

I look forward to hearing from you.

Best regards,

Hideyuki Namba

翌日、Don氏より以下のメールをいただいた。

Dear Hideyuki,

Thanks for writing. I will be out of the office August 13 - 24th but perhaps one of my colleagues could meet with you. I'd Gregg DiNardo and Jen Chuks-Crabill in case we don't connect prior to the 13th. Once you finalize your travel plans, please let us know.

We look forward to meeting you.

Best,

Don

メールを通じて、私はアマースト大学の歴史について研究をしており、なぜ私がアマースト大学に行きたいのかということ伝えた。このようなコミュニケーションが今回の訪問と面会の機会を作るうえで非常に重要であった。このメールの後、数回のやり取りを経て、日程調整を行い、さらにこちらの関心事や質問事項を箇条書きにし、Don氏に面会の希望を再度伝えた。

1. I would like to tour the historic athletic facilities at Amherst College.
2. What has changed since the original start of physical education?
3. The relationship between the athletic department and student education.
4. The characteristics and efforts of the current athletic education at Amherst College.

Don氏(写真1)との打ち合わせの主要な3つのポイントを以下に示す。1) 大学における体育・スポーツの位置づけ、2) 体育科目(授業)と競技スポーツの役割の違いと共通点、3) 体育教育および競技スポーツを支える組織、施

設および教員等、指導者の編成、以上である。

Don氏との面談から得られた情報に調査内容を交えて次に述べる。アマースト大学では、アスレティック部門に28の競技スポーツ部と20名のヘッドコーチが所属しており、全米体育協会(NCAA)のDivision IIIに属している。総学生数は1,800人であり、学生数に対して充実したスポーツ部門が提供されている。各競技スポーツのチームは、アマーストマンモスという愛称で呼ばれている。また、学内の博物館にはマンモスの化石(骨)が展示されており、マンモスはその歴史と力強さなどを象徴する要素を持ち、この大学のシンボルとなっている。一方、正課のカリキュラムに組み込まれている体育科目は「ウエルネス&フィットネス」という名称で春学期には、16の科目が提供されていた。これらの科目には、ヨガ、太極拳、ニュースポーツ、ウォーキングなどの有酸素性運動、ストレングス&コンディショニングなどが含まれていた。これらの実技・実習の授業は主に非常勤講師が担当しており、多くの講師が学外から招かれているが、その中にはアスレティック部門のヘッドコーチ3名も兼任で科目を担当していた。体育科目の成績評価について確認して分かったことは、運動技能に加え、コミュニケーションやリーダーシッ



写真1 体育局長の Donald Faulstick 氏(写真左)

プを重要視しているが、体育科目はGPAには影響しないことが分かった。また、アマースト大学の体育科目には、学生だけでなく、教職員や地域の方も自由に参加できることが明らかになった。私は非常に驚き、その場でスポーツの語源（ラテン語）である「Deportare」について言及した。Don氏もこれに同意して、二人で思わず笑いが起きた。また、体育科目と競技スポーツに加えて、日本では同好会に相当するクラブスポーツが存在することが紹介された。クラブスポーツには、ラグビー、アルティメット、セーリング、フェンシングなど14チームが所属している。ここまでをまとめると、アマースト大学には、アスレティックデパートメント（体育局）という大学スポーツを統括する組織があり105名のスタッフが在籍しており、「体育科目（16講座）」、「競技スポーツ（28チーム）」、「クラブスポーツ（14チーム）」の3つがあり、それらをサポートする複数の部門がある。サポートする部門は、スポーツメディスン、コンプライアンス、コミュニケーション、アマーストリード（リーダーシップ）などがある。すなわちスポーツ障害の予防、コンディショニングやトレーニングなどの身体的・肉体的な部分でのサポートに加え、コミュニケーションの促進やリーダーシップを養成したり、コンプライアンスを勉強したり、メンタルヘルスをサポートする仕組みがある。

アマースト大学は先に述べたように、伝統あるリベラルアーツカレッジで全米でも常にトップクラスにランキングされている。このような大学において、学生アスリートは、全学生1,800人中550人も占めている。実に3人に1人程度が学生アスリートで、かつ、全米トップクラスの学業成績を維持している。どうして、そのようなことが可能なのか、勉強でトップクラスの学生が何故、そこまでスポーツに一生懸命取り組むのかについて、その背後に何があるのかを探ってみた。Don氏に対して「アマースト大学でのスポーツ活動や体育のゴールは何でしょ

うか。」という質問に対して、4つの回答をいただくことができた。

- ① Positive student experience more important.
- ② Great team culture –respect, friendship, inclusion.
- ③ Success on court or field.
- ④ Team that entire campus can be proud of.

若干ニュアンスが異なるかもしれないが翻訳を以下に示す。

- ①学生のポジティブな経験がとても重要。
- ②尊敬、友愛、包摂（一体性）といった優れたチーム文化。
- ③コートやグラウンドでの成功体験。
- ④キャンパス全体が誇れるチーム。

そして、Don氏よりこれらを遂行するコーチに対して、

「Coaches get respect by how they treat athletes.」
「コーチは、アスリートへの接し方によって、尊敬の念を得ています。」

という言葉をいただくとともに、「コーチは、学生アスリートに対して、人として、学生として、アスリートとして様々な面でサポートをしており、それはまるでパズルを埋め合わせるようにケアをしている。」ということであった。

また、会話の中でアマースト大学では、アスレティックデパートメント以外の大学スタッフも、このようなアスレティックデパートメントのスポーツ教育の意義を理解して、大学全体を挙げて取り組んでいるとのことであった。更に興味深いことは、カリキュラム内の「体育科目」と「クラブスポーツ」とカリキュラム外の「競技スポーツ」の両方は、同じコンセプト、同じミッションステイトメントに基づいて運営されていることを強調されていた。

そのミッションステイトメントは、英語で以下のように記されている。

“Amherst College educates students of exceptional potential from all backgrounds so that they may seek, value, and advance

knowledge, engage the world around them, and lead principled lives of consequence. The Department of Physical Education and Athletics promotes this mission through the offering of recreational, intramural, club and intercollegiate activities that encourage students to shape their education within and beyond the curriculum. Academic excellence, high ethical standards, good sportsmanship and equal opportunities are the foundations of the Department's commitment to the health and well-being of the students and of the greater campus community.”
(以下翻訳)

「アマースト大学は、異なるバックグラウンドを持つとても優れた学生たちを育て、彼らが知識を探求し、尊重し合い、世界と交流し、意義ある生活を送ることをサポートしている。体育教育と運動部は、学生がカリキュラムの枠を超えて教育の機会を得られるように、レクリエーション、競技大会、クラブ、対校競技などを通じて、この使命を推進している。学術的な卓越性、高い倫理基準、スポーツマンシップ（フェアプレー）、平等な機会の提供は、学生と大学コミュニティ全体の健康と幸福を作り出すために体育局の根本的な役割である。」

学内の広大な敷地に、野球場（写真2）、サッカー場3面、テニスコート14面、室内はホッケー場、トレーニングセンター、室内テニス



写真2 アマースト大学の運動施設（野球場）

コート、体育館があった。体育館内には、アマースト大学の体育部門の歴史に関するパネルが壁一面に掲示されていた（写真3）。

1.2 マサチューセッツ州マサチューセッツ工科大学

最先端の理工系大学における大学体育の実態調査の一環として、2023年8月4日にMITのアスレティックセンターおよび体育施設を訪問した。事前の情報収集としては、MIT recreation という X（旧ツイッター）や MIT Physical Education というインスタグラムのアカウントをフォローし、現地の状況について知る機会を作り準備をした。

MITの2022年度の学生数は、11,858人でそのうち39%が学部生（4,657人）であり、61%が大学院生（7,201人）である。MITのランドマークの一つである Rogers Building には、MITの価値を示すバナー（弾幕）が掲げられておりそれには、以下の3つの価値が掲示されている。

“Excellence curiosity” 「卓越した好奇心」

“Openness respect” 「寛容さと尊重」

“Belong community” 「コミュニティへの所属」

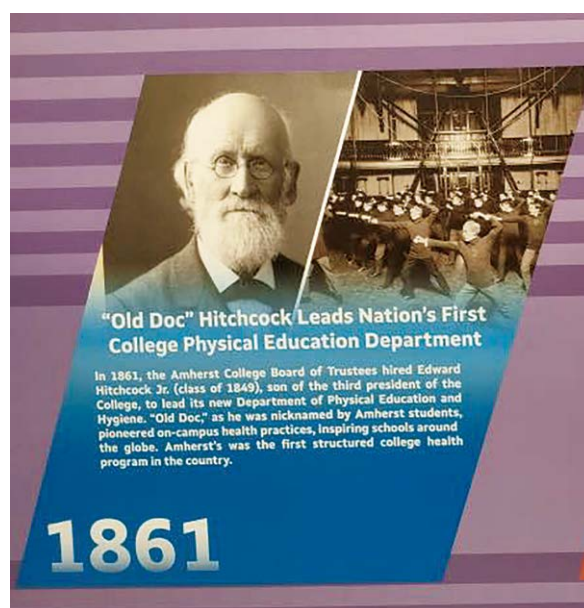


写真3 米国初の体育に関する館内の掲示

屋外の体育施設は、サッカー場3面、ラグビー場、ソフトボール場、野球場、陸上競技場、テニスコート12面が同じ敷地内にあり、隣接するチャールズ川にレガッタの施設があった。屋内施設は、テニスコート、アイスホッケーリンク、スポーツ&フィットネスセンターがあった。スポーツ&フィットネスセンターにはプールやトレーニング施設、そしてアスレティックデパートメントのオフィスがあった。ノンアポイントメントであったが、この日のオフィスの受付担当者Taji Manning氏(写真4)にMITの体育について質問をした。彼は、「MITでは、体育科目を8単位取得する必要があるが、1科目が2単位であるので、4つの科目を履修し単位を取得する必要があること。また、伝統的に水泳の授業が必修であること。」を教えてください。そして、「MITでは体育の成績は、GPAに含まれる。」ということも分かった。私は事前の調査でMITの水泳の授業ではテストに合格する必要があるが、MITに隣接するチャールズ川を泳いで渡るテストが過去にあったという情報を得ていたので、彼に、「水泳の授業でチャールズ川を泳いで渡ることが課せられているのか?」と半分冗談のように聞いてみた。すると、Taji氏は、「その話は聞いたことがあるけど、それは昔の話で実際はプールでテストを行っている。」と談笑しながら答えていただいた。本当にチャールズ川を横断する泳力テスト



写真4 取材協力したTaji Manning氏(写真右)

が行われていたか真相は分からないが、受付の学生が知っているくらいなので、有名な話であると感じた。MITに隣接するチャールズ川の川幅は、ハーバード橋付近だと凡そ600mになるので、水泳が苦手な学生にとっては難易度の高いテストであったことが想像できる。一方で、当時の体育教員の情熱がうかがえるエピソードでもある。なお、ホームページ(MIT Physical Education & Wellness HP)には、現在の水泳のテスト内容が動画で紹介されており、1) 100 yardsを止まらずに泳ぐこと(競争ではなく自分のペースで、最初の75 yardsは下向き又は横向きで、最後の25 yardsは背泳ぎ)、2) 飛び込んだ後に立ち泳ぎ5分継続する、の2つをクリアする必要があるが、水泳の初級者向け授業を6週間受講するとテストを受けずに済むようであった。米国では、事故死の第5位が溺死によるものであることから、親が泳ぎ方を知らなく子供に教えていない家庭で溺死が起きていることや、MITでは国際的な学生が多く、留学生の多くは水泳を教わったことがないことから、自己生存のためのスキル獲得として、1947年代より継続して水泳のテストが行われている。ハーバード大学、コーネル大学、ダートマス大学、プリンマー大学、スワースモア大学、その他一部の軍事学校において、現在でも水泳の授業を義務付けている(Rookie Road, 2023)。

また、事前に調べていたMIT Physical Educationのインスタグラムで、体育の授業で海賊のコスチュームを着て数名がコミュニケーションを取っている写真を見ていたので、それについて、「何の意図があって海賊の格好をしていますか?」と質問をしたところ、Taji氏より「それは単純に楽しいからではないか。」という回答があった。実にアメリカ人らしい回答であると感じたとともに、日本人の私は、真面目に考えすぎて、コミュニケーションを取るためとか、海賊の役割分担を決めたり、その役割を果たすことの意味を考えたりすることを狙ってい

るのかと思っていたので、肩透かしにあった。一方、先に述べた MIT の 3 つの価値「卓越した好奇心」、「オープンさと尊重」、「コミュニティへの所属」にこのような取り組みは合致するのかもしれないと思った。

1.3 大学体育の実態調査のまとめ

全米でもトップクラスのリベラルアーツカレッジと理工系単科大学の 2 校の大学体育事情を調査し、共通点として、大学の教育方針に基づき体育科目、競技スポーツ、クラブ活動が位置づいており、それぞれの大学において、特徴あるカリキュラムが組まれていると感じた。アマースト大学では、地域や教職員と学生の連携が特徴であり、MIT では、必修授業に位置づけることで、必然的に学生同士のコミュニティづくりを促進し、研究に没頭する理工系学生の体力づくりやコミュニケーション、リラックス、さらにいうと人間的な教育の場を提供していると考えられた。最も驚かされたことは、両大学とも大学の規模（学生数）に対して、体育・スポーツの施設が非常に充実しており、アスレティックデパートメントや体育教育に関する組織が充実しており、体育科目、競技スポーツ、クラブスポーツのマネジメントが機能していることであった。

2. 学生スポーツ（大学野球）の取り組みと大学における学生スポーツの調査

2.1 米国における学生スポーツ（大学野球）について

米国では、野球は、アメリカンフットボール、バスケットボールに次ぐ人気種目で、大リーグ（以下 MLB: Major League Baseball）に代表されるようにメジャーな人気スポーツである。米国では日本のような社会人野球は存在せず、大学野球は MLB の土台となっているだけでなく、多くの大学はアスレティックデパートメントに野球部を置いており、教育的な意味も含めて学生アスリートを受け入れている。

米国の体育協会では、NCAA が最も大きな組織で、ディビジョン（以下 D: Division）I, II, III に分けられており、競技力が高い主な主要大学は D I に所属している。NCAA には約 1,100 校が加盟しており、NAIA: National Association of Intercollegiate Athletics には約 250 校が加盟している。NAIA には元プロ選手が所属でき、奨学金も充実しているなど NCAA に比べるとやや自由度が高い特徴がある。そのほか、2 年制大学では、NJCAA: National Junior College Athletic Association に約 500 校、CCCAA: California Community College Athletic Association に 108 校、NWAC: Northwest Athletic Conference に 36 校が所属している。合計すると全米の大学野球には約 2,000 チームある。1 チームに所属する選手の人数は、30 ~ 50 人である。一方、日本の大学硬式野球は、2023 年 5 月時点で 26 の連盟があり 370 大学が大学野球連盟に所属し、登録選手数は 28,252 人である（全日本大学野球連盟 HP）。単純にチーム数で登録者数を割ると、1 チーム 76 人が在籍していることになるが、300 人を超えるチームも存在する。野球は公式戦のベンチ入りは 25 人である。日本の大学野球の環境において受け皿が限られていることが分かる。日本人の野球留学生のウェブサイト（BIKIBLOG HP）の情報によれば、2023 年のシーズンには約 50 人の日本人が米国野球留学をしており、2023 年は 9 名が NCAA D I に所属している。

2.2 ワシントン州オリンピックカレッジ

シアトルにある Olympic college（以下 OC）の野球施設を 2023 年 8 月 3 日に訪問し、3 名の日本人留学生に会い、米国の大学野球の一端を知る機会を得た。日本と米国の大学野球の違いに公式戦の試合数が挙げられる。日本で最も有名な六大学野球や東都大学野球のリーグは、春の秋の両方を合わせても 30 試合前後である。一方、米国では 1 シーズン制だが、訪問した OC は NWAC に所属しており、2023 年度

のシーズンは42試合が行われていた。さらに、多くの選手は、自身のスキルに合わせたサマーリーグに参加する。訪問した日本人選手はサマーリーグで31試合に出場しており、秋シーズンにも練習試合が組まれていた。このような試合数の違いにより、米国では練習時間が短く、日本では基礎練習を中心に練習時間が必然的に長くなる傾向があると考えられる。見学をした練習では、バッティングゲージを使って打撃練習をしていた。日本でよく見られる斜め横からのトスバッティングは行われず、全て前から投げられた実践的なボールを打つ練習が行われていた。選手へのヒアリングでは、守備の連係プレーのような練習は比較的少なく、打撃練習が多いとのことであった。また、学期中には週3回朝練習でウェイトトレーニングが行われ、集合時間が早いため、遅刻・欠席は厳禁で遅れると追加練習が課せられることもあるようであった。日米の練習内容の違いについて、米国は、短時間で効率的な内容を重視していると考えられ、このことは文化的な違いも影響しているかもしれないが、上記に示したように1チームに所属する選手数や試合数も影響していると思われる。

各大学体育協会はスポーツと学業の両立を目指しており、NCAAでは、大学に対して、学業成績、1年間での単位取得数、卒業に向けての単位取得率の報告義務を課している。1年で取得すべき最低単位のパーセンテージを定め、その基準をクリアしなければ競技参加を制限する規則を設けている(松尾ら, 2018)。2年制大学から4年制大学への編入においても、競技成績に加え学業成績も重視されている。このことは、アマーフト大学やMITのミッションステートメントやコアバリューで示したように、各大学の方針の中で、スポーツをすることの意義を競技力のみ依存しないこともあるかもしれない。一方、アマーフト大学やMITは学業でトップクラスだが、スポーツは、NCAAのDⅢに所属しているため、DⅠの競技力重視の大

学とは異なるのかもしれない。

2.3 ケープコッドリーグ

ケープコッドリーグは、米国大学野球サマーリーグの最高峰の大会で、主にNCAAのDⅠに所属してシーズンで活躍した選手が招待制で参加できる。マサチューセッツ州のコッド岬で行われ、1885年に起源をもつ歴史のある大会で非営利団体が管理しており、主にボランティアによって運営されている。招集された選手は、ポジションなどを考慮して10チームにリクルートされ、44試合のレギュラーシーズンが行われ勝ち進んだチームはチャンピオンシップに参加できる。この大会に出場した卒業生のうち、MLBで毎年350人もの選手が活躍している(Cape Cod Baseball League HP)。観戦した試合は、8月4日にEldredge Parkで行われたOrleans vs Harwichであった。印象的な出来事が2つあった。一つ目はOrleansに日本人選手の大山盛一郎選手(写真5, UCアーバイン)がスターティングメンバーで出場して活躍していたことであった。二つ目は、会場の雰囲気は日本では感じたことのない独特な雰囲気であったことである(写真6)。入場は無料で、子どもから高齢者まで様々な方が、折り畳み式の椅子を持ってきて観戦をしていた。まさに、地域や生活の文化として野球がその地域に根付いているものと感じた。言葉では上手く表現できないかもしれないが、例えばファールボールを子どもたちが競うように走って拾いに行き、試合終了後には、観客もフィールド内に行き選手と自由に交流することができた。また、それでいて、選手もグラウンド整備を手伝って大会の運営をボランティアスタッフ、会場の観客と一緒にやっている雰囲気があった。まさにスポーツの原点を感じることができ、プロ入りを目指しているDⅠ選手にありながら、無邪気にプレーをして、終了後はファンとのコミュニケーション、グラウンド整備を行うなど、情熱と謙虚さを兼ね備えており、競技レベルだけではなく、



写真5 大山盛一郎選手（写真右）



写真6 試合会場のアナリスト

人間性に触れることができた。米国大学野球サマーリーグの最高峰であると云われる所以を感じることができた。最後に大山選手と握手をしてコミュニケーションをとることができ、写真を撮っていただいた。また、X（旧ツイッター）をお互いにフォローすることができた。

3. 他のスポーツ関連施設への訪問

3.1 ジャッキー・ロビンソン博物館

米国における野球文化、大学野球を知る上で重要な情報が得られると考え 2023 年 8 月 6 日

にジャッキー・ロビンソン博物館を訪問した。ジャッキー・ロビンソン氏（1919-1972）は、MLB で最初にプレーをしたアフリカ系アメリカ人で、人種差別が色濃く残る時代に、様々な障壁を乗り越えて活躍したプロ野球選手である。1947 年に MLB デビューを果たしたことを記念して、毎年 4 月 15 日にはメジャーリーグの全選手が背番号 42 をつけて試合に参加することで彼の偉業が称えられている。また、野球選手を引退した後、ジャッキー氏は黒人の地位向上を求めた活動にも影響を与え、人類史において歴史的偉業を成し遂げた。そのジャッキー氏の功績を称え、後世に残すために 2022 年 9 月 5 日にニューヨークにジャッキー・ロビンソン博物館が開館した。特に大学スポーツとのつながりという視点で、ジャッキー氏は、学生時代に UCLA に所属し、野球だけでなくアメリカンフットボール、バスケットボール、陸上競技（幅跳び）においても活躍していたことが展示されていた。日本では、ほとんどのアスリートが高校生や大学生の時に一つの競技に専念する。しかし、米国ではシーズンごとに複数の種目を行うことは一般的で、むしろ複数種目に取り組むことが、最終的な競技力向上や人生の幅を広げることにつながっているように感じることができた。例えば、ジャッキー氏は MLB で 2 回盗塁王のタイトルを獲得しているが、それは陸上競技（短距離走）の経験が役立っていることは容易に想像できた。野球の牽制球への帰塁では、バスケットボールで身に付けた方向転換の動作が役に立っていることも想像に難くはない。引退後に全米黒人の地位向上の活動に向けて公民権運動にも積極的に参加をしている。このような社会的な活動ができたことも、学生時代に勉学に励みながらも様々なスポーツに取り組み、困難な状況を乗り越え、様々な人とコミュニケーションを取ってきたことも役に立ったかもしれない。ジャッキー氏は 1972 年 10 月 24 日に 53 歳の若さで亡くなったが、館内スタッフに確認したところ、夫人のレイチェル氏はご

健在で101歳を迎えられたとのことであった。

3.2 アリゾナ大学レクリエーションセンター

アリゾナ大学の Christopher Arellano 氏にアポイントメントを取り、研究や最新情報についてミーティングを行った。過去に Arellano 氏とは Zoom を用いて身体活動や健康問題についてのミーティングを複数回行っていった。彼はヒューストン大学に所属していた際に、オリンピックで金メダルを9つ獲得したカール・ルイス氏とコーチのトム・テレッツ氏と共同で“The Science of Speed The Art of the Sprint”というタイトルの書籍を出版しており、私は翻訳出版に協力した機会があった。対面の打ち合わせは初めてであったため、お互いに直接話すことができたことは大変喜ばしい機会となった。Arellano 氏は、アリゾナ大学で9月の新学期スタートに向けて、ヒューストンから引っ越してきたばかりであった。

専門分野はバイオメカニクスで、ヒトや動物を対象に効率の良い動きや、筋肉-腱複合体の役割を研究している。アリゾナ大学での所属は、医学系の基礎領域である。授業を持つのかという質問に対して、「週に1~2コマ担当する」と話していた。研究に対する大学のサポー



写真7 アリゾナ大学の Christopher Arellano 氏 (写真右)

ト体制が整っていると感じるとともに、私が「週に8~10コマ担当している」ことを伝えると、彼はとても驚いた様子であった。そして、私はデータ分析に十分な時間を取ることができないことを伝えたところ、データ分析の一部分を大学院生に依頼するという提案を受けることができたため、是非、依頼させていただきたいことを伝えた。大学が夏季休業期間であり、Arellano 氏の研究室もまだ準備中であったため、学内の研究施設には立ち入ることができなかった。一方、アリゾナ大学のスポーツ施設は開放されており、大学スポーツの実態を知る上で重要だと考え施設見学を行った。アリゾナ大学のレクリエーションセンターは、巨大なトレーニングルーム、プール、複数の体育館、ミーティングルームからなる施設であった。学生は学生証を見せれば館内に自由にに入れるが、学外者であっても、パスポートを見せて、8ドル払えば自由に施設を利用することができた。施設に入ると、壁に大きな文字でアリゾナ大学のコアバリュー（中核となる価値）が掲示されていた。そこには、以下の6つの単語が示されていた。

“Determination” 「決意：困難に立ち向かい、目標達成への意志。」

“Integrity” 「誠実さ：正直で倫理的な行動、他人への誠実さ。」

“Exploration” 「探求：新しいことを学び、探し求める好奇心。」

“Adaptation” 「適応：状況に合わせて柔軟に変化し、調整する能力。」

“Compassion” 「思いやり：他人の感情や困難を理解し、助けようとする気持ち。」

“Inclusion” 「包摂：すべての人を受け入れ、多様性を尊重する社会の構築。」

米国の多くの大学で、このような VISION や CONCEPT を歴史とともに大事にしている印象を受けた。また、ルールは決まりだからというのではなく、コアバリューに基づいて柔軟にルールを変更しているように感じた。

4. まとめ

米国の最先端大学体育・スポーツ科学に関する調査を行うために、シアトル、ボストン、アリゾナの3つの都市とその周辺の複数の大学（Olympic College, Amherst College, MIT, Arizona University）を見学した。特に、アマースト大学では、大学体育の発祥地として、最も成熟した体育・スポーツの取り組みを行っていると感じた。体育科目、競技スポーツ、クラブスポーツの3つが、尊敬、友愛、包摂（一体性）という共通のコンセプトに基づいて運営されていることが挙げられた。アマースト大学やアリゾナ大学では、体育科目は必修ではなく成績にも関与しないが、MITでは複数の体育科目が必修であり、実技テストも実施されていた。このように大学によって体育科目の取り組みは異なるが、訪問した全ての大学で、大学のステートメントやコアバリューとスポーツ活動が密接に結びついており、アスレティック部門の運営に各大学が力を入れており、施設や設備だけでなく、スタッフの配置やスポーツをサポートする部門の運営も行われていることが分かった。このような優れた環境で競技スポーツ選手が育成され、スポーツ科学に関する研究が進められていると感じた。

わが国の大学運営において、米国のようにスポーツ・体育領域に十分な予算や人件費を投じることは難しいかもしれない。しかし、大学の役割として、将来の全人格的な発展を目指す上でスポーツは欠くことができず、特に競技スポーツを単に大学の名誉や宣伝に利用するのではなく、学生教育の一環として取り組むべきである。体育科目、競技スポーツ、クラブ活動の運営は、各大学の関係者が十分な教育を受けた上で、複数の部門が連携した組織を作り、専門知識や経験に加え、高い倫理観と誠実性を持って行うべきだと考える。

謝辞

本調査研究は、日本大学令和5年度海外派遣研究員（短期）の制度を利用して進めることができた。また、渡航中の業務に支障がでないよう所属学部一般教育教室にご理解ご協力いただいた。関連する教職員の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。

文献リスト

Allen Nathan, Physical Culture in Amherst College, Stone & Huse, 1869.

安西祐一郎, 大体連のこれまでとこれから, 大学体育, 121, 54-61, 2023

https://2020.daitairen.or.jp/?page_id=17651, 2023.1.6

Best National University Rankings,

<https://www.usnews.com/best-colleges/amherst-college-2115>, 2023.12.28.

BIKIBLOG / アメリカ大学野球留学,

<https://www.youtube.com/@bikiblog10/>, 2023.1.10

Cape Cod Baseball League,

<https://www.capecodbaseball.org/>, 2023.1.10

梶田和宏, 木内敦詞, 長谷川悦示, 朴 京眞, 川戸湧也, 中川 昭, わが国の大学における教養体育の開講状況に関する悉皆調査研究, 体育学研究, 63 (2), 885-903, 2018.

公益財団法人全日本大学野球連盟,

<https://www.jubf.net/info/playernum.html>, 2023.1.10

松尾博一, 相澤くるみ, 井上雄平, 松元 剛, 米国におけるNational Collegiate Athletic Association (NCAA) の歴史的変遷, 大学体育研究, 40, 47-64, 2018.

MIT Education, <https://www.mit.edu/education/>, 2023.12.28.

MIT News, <https://news.mit.edu/>, 2023.12.28.

MIT Physical Education & Wellness,

- <https://physicaleducationandwellness.mit.edu/>, 2023.12.28.
- 文部科学省, 18歳人口及び高等教育機関への入学者・進学率等の推移,
https://www.mext.go.jp/content/20201209-mxt_daigakuc02-100014554_2.pdf, 2023.1.6
- 大櫃敬史, 日米体育交流に関する実証的研究: アマースト方式の導入と日本近代体育の成立, 57-60, 学文社, 2015.
- 大内敬哉, 国民スポーツの動向, 中京体育研究, 16 (2), 25-38, 1975.
- Rookie Road Inc. Dose MIT Make Students Pass A swim Test? ,
<https://www.rookieroad.com/swimming/why-does-mit-make-students-pass-swim-test-5842998/>, 2023.12.28.
- 田崎健太郎, 大学体育の設置基準の規制緩和を巡る議論に関する研究, 大学体育研究, 23, 1-16, 2001.
- 田附俊一, 日本の体育小史—新島襄と同志社の関り—, 同志社スポーツ健康科学, 6, 72-80, 2014.